

14

讃岐尾池家，備中赤木家の資料を中心とする 18世紀瀬戸内地域の医学に関する考察

町 泉寿郎¹⁾，中澤 淳²⁾¹⁾ 二松学舎大学，²⁾ 山口大学

【はじめに】

讃岐丸亀と大野原（現観音寺市大野原）の医家尾池家は、その縁戚に連なる中澤家（香川県三豊市詫間）に資料が伝存する。備中国総社の医家赤木家は、6代・7代が尾池家に学び、その子孫宅（岡山県倉敷市鶴形）に伝存する資料は尾池家に関連が深い。両家所蔵資料からその概要を報告する。

【医家尾池家歴代】

初代立誠（1704～71，名義均，通称恭庵）は京遊して後藤良山に学び、大野原に開業する傍ら後藤流古方を講じ、瀬戸内中心に遊学者が多かった。著書『医方志彙』『痲非説』『耻斎暇録』『恭庵先生口授』等。慈雲寺に残る墓碑は大坂の儒者三宅春楼の撰文にかかる。

立誠の養嗣子である2代薫陵（1733～84，名は正常，通称は讓軒・礼介）は、21歳で京遊して尾池家を継承したが、49歳で丸亀藩主京極高中に召出され、立誠の3男義永（1747～1810）に家を譲って丸亀城下に別家した。著書に『経穴摘要』『古今医変』『古方要方』『素靈八十一難正語』『痘疹証治考』『脚氣論』『医方便蒙』『薫陵方録』『試効方』等。宗泉寺に残る墓碑は後藤慕庵の撰文にかかる。

丸亀藩医尾池家を継承した薫陵の門人村岡濟美（1765～1834，名珉槃，通称左膳，別号桐陽）は、一説に後藤良山の孫とも言われ、中井竹山や皆川淇園に学び、菅茶山・頼山陽・篠崎小竹らと詩文の交流があった。濟美の長男静処（1787～1850）は、丸亀藩医を継承し、著書に『傷寒論講義』『静処方函』『治痘筆記』等。

【医家赤木家歴代】

重宗を家祖とし、6代簡（1724～91，通称要蔵，別名尚綱）以降やや詳細な記録が残る。簡は尾池立誠に医学を学び、在村のまま浅尾藩医となった。7代浚（1752～1813，通称修平）も尾池立誠・薫陵に学んだ。8代立（1783～1822）は京遊して吉益南涯に学んだ（1807入門）。9代辨（1801～62）は笠岡西大島村の医家原田恭庵の四男で、兵学者原田一道（1830～1910，陸軍少将，正二位勲一等男爵）は長兄碩斎の長男である。10代鼎（1831～99，号朴斎）は山田方谷・斎藤拙堂に学び、江戸にも遊学した。

【尾池薫陵の京都遊学】

遊学日記『筆記』（1754～58）によれば、薫陵は良山の四男一が運営する後藤塾に入って後藤流古方を学ぶとともに、良山の高弟香川修庵の晩年に従学し修庵の病没・葬儀にも立ち会った。

赤木簡宛書簡によれば、薫陵の1759年の京都再遊は、恰も山脇東洋『蔵志』・吉益東洞『医断』の刊行時で、薫陵は東洋・東洞・松原一閑斎と交流した上で、東洋が最も医術に長じ、また後藤流に忠実であることを見極めて入門した。薫陵の東洋評価が解剖視臓にはなく、主にその漢方処方知識にあったことは注目される。『医断』については、巻頭「司命」「死生」篇に疑問を感じ、東洞に面会して直接疑問を質してもなお疑問は水解せず、「天命説」には同調できなかった。

帰郷後の薫陵は古方医学の実践に務める傍ら医学・儒書を講じ、多くの入門者・聴講者が集まった。薫陵の研鑽の背景には隣村和田浜の名医合田求吾（1723～73）の存在も隠見し、両者の切磋琢磨する関係が推測される。合田求吾を考える上でも、後藤流の有力門人であった尾池家の存在は念頭に置く必要がある。

【その後の尾池家とその周辺】

薫陵は1760年代における最先端医学を吸収したが、あくまで後藤流を基盤とし吉益流には距離を置いた。しかし吉益流は学びやすさが歓迎されて普及し、尾池門人中にも吉益流に魅力を感じる者も現れはじめる。1780年代以降、中井竹山の懐徳堂等、大坂に学問が興隆し、瀬戸内などからの遊学者を集めるようになる。例えば備中西阿知出身の儒医丸川松隠（1758～1831）は初め薫陵に学び、後に大坂で中井竹山に学んでいる。1790年の赤木浚宛書簡で松隠が唯一評価しているのは福井楓亭で、吉益流盛行に伴う医療過誤問題から劇薬の安全な使用が高い関心事であったことが窺える。古方派の問題点が露呈するなか、福井のように漢方古典に新たな可能性を探る者、蘭方に別の進路を見出す者など、医界は岐路に立っていた。